

サービラーニングで育む主体性とチームワーク —新発田市・村上市での出店体験から—

主濱 祐二

はじめに

本稿では、筆者が2023年度に担当した2年次演習でゼミボランティアとして実施した2つのサービラーニングについて報告する。¹⁾ 本紙の特集である「しばたサマーフェスティバル2023」での経験を中心に述べるが、それと対比させる形で、村上市の地域行事への参加についても紹介する。趣旨や規模の異なる2つの活動から学生が何に気付き、どのような変容に結びついたか、参加状況や事後レポートの記述をもとにまとめる。

筆者の演習は、英語文化コミュニケーション学科のうちとくにキャリア・コミュニケーションコースの学びに合うよう計画されているが、教室内での通訳・翻訳演習だけでは、コースで理想とする主体的にチームで協働できる人材を育成することはできない。そこで、協働のための素養はサービラーニングで補完することにし、計画・実行・振り返りの一連の過程をとおして非認知能力を養う機会を継続して演習に取り入れるようになった。

1. しばたサマーフェスティバル2023（2023年7月）

演習での専門的な学びをサービラーニングで応用することが理想的ではあるが、初めて演習に配属される2年次前期という時期を考慮し、今回はチーム・ビルディング、とりわけ学生間のコミュニケーションと目標「出店を成功させる」の共有・達成を重視した。サービラーニングは毎学期続けるため、内容の深化は次回以降に譲り、代わりに授業内の話し合いでどの学生の提案にも耳を傾ける雰囲気作りと発言の機会の確保に努めた。

4月から5月にかけて演習の時間の一部を割り、サマーフェスティバルの趣旨や出店の決まり事を伝えた上で、学生に自由に企画を話し合わせた。「夏祭りの定番路線でいきたい」「調達や調理のし易さを優先すべき」「10人いれば2品でなく3品提供可能ではないか」など活発に意見が出され、結局焼き鳥、焼きそば、チュロス、タピオカドリンクをそれぞれ2～3名程度で分担し提供することに決めた。また、ゼミボランティアの一環として実施するため、空き時間での会場のごみ拾いと売上金の一部の寄付も行うことにした。

サマーフェスティバル当日は天候に恵まれ、集客も多く盛況で、大学の出店エリアも夕方5時頃から混雑し始めた。作り置きでなく店頭で調理するスタイルにしたため、人出が足りないほど作業が忙しくなったが、「私焼きそば盛付けます」「次のチュロス出しとくよ」などお互いにコミュニケーションを取りながら、学生たちは自分の分担を越えて自然に協

力し合っていた。売上げにこだわるというより、「廃棄を出したくない」という思いが強かったようで、近くを通る来場者に笑顔で積極的に呼び込みをする姿も印象的であった。

事後レポートの内容から、学生はとくにチームワークや効率に関する気付きを得たことが読み取れた。以下、学生の記述を抜粋して紹介する。

- ・黙って何もしない人はおらず、ゼミ生全員が何か役割をもって行動していた。
- ・調理作業で余裕がないとき、〇〇さん・××くんが様子を見て助けてくれた。
- ・最低でも調理2、盛付け1、販売1の4人チームでないと回らない。今回は3人チームだったので、余裕がなかった。
- ・当日の買出しに時間をかけ過ぎた。1時間くらい前倒して行動しておけばよかった。

計画・実行から振り返りまでの流れを、図1にPDCAサイクルとしてまとめた。チームワークが養われ、売上目標を達成することはできたが、分担人数や当日の準備については改善の余地がある。図2は事後レポートに現れる特徴的な語を可視化したワードクラウドである。特徴的かつ高頻度の語に「出し合う」「決める」「行動」「設営」「チーム」が含まれ、自分たちで企画しチームで最後までやり抜く経験になったことがうかがえる。²⁾

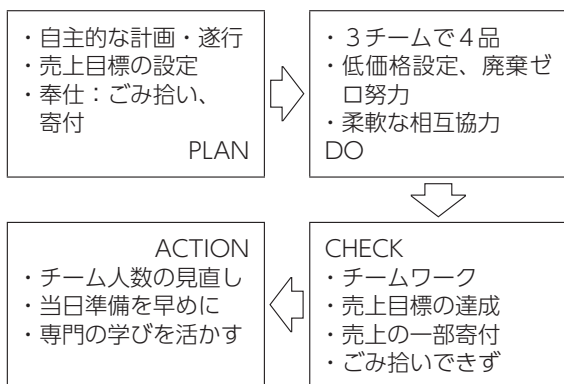


図1 PDCAサイクル (サマフェス)

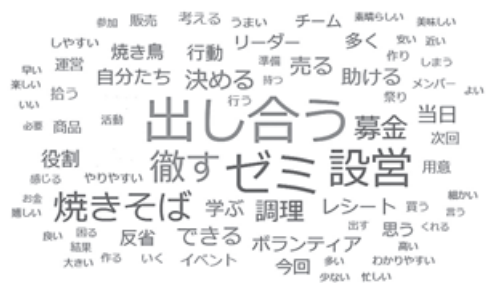


図2 ワードクラウド (サマフェス)

2. まち協フリーマーケット (2023年11月)

科目履修生として学ぶある方の紹介で、村上市塩野町の地域行事「まち協フリーマーケット」に出店することになった。「若者に来てもらい盛り上げてほしい」という先方の意向を伝えたくて、学生主体で責任をもって行うよう指示したところ、地域の特産物、時期や気温、予想される客層を考慮に入れ、「来場者に温かさを届けたい」という思いから、鮭汁とおしるこを提供することに決めた。ボランティア活動として寄付と設営の手伝いもすることにし、地域の来場者や他の出店者と積極的に交流することも目標とした。³⁾

買出しや下調理などの準備作業はスムーズで問題なかったが、汁物は現地での作業が加

熱と調味程度で済むため、やることが少なく時間を持て余してしまった。しかし、学生たちは他のブースの出店者と会話をしたり、地域の方におごってもらったりと可愛がられている様子で、交流を楽しんでいるようだった。イベントの集客自体が少なかったため、残った汁物も捨てざるを得ず、結果的に収益は出なかったが、サマーフェスティバルとは異なる性格の行事への参加から、学生は地域コミュニティの温かさを体感したようである。

前節と同様、図3にPDCA サイクル、図4に事後レポートのワードクラウドを示す。企画の方向性、役割分担、会場でのコミュニケーションについては評価できるが、今後の実践では当日の作業量や廃棄の抑制も考慮する必要がある。学生たちの振り返りに現れた特徴的な語は「反省」「ローカル」「売れ残り」「活かす」などで、自分たちで努力して作ったものが無駄にならないよう、今回の教訓を次の機会に活かそうとする内省が見られる。

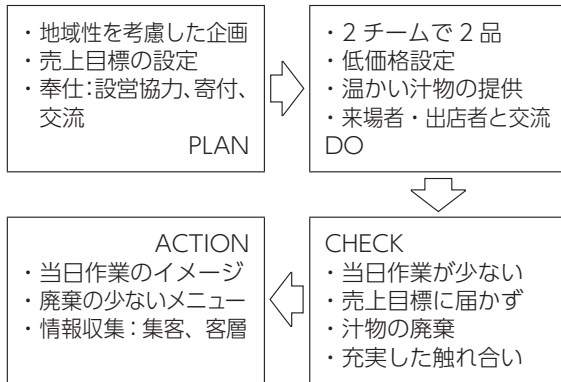


図3 PDCA サイクル (村上)

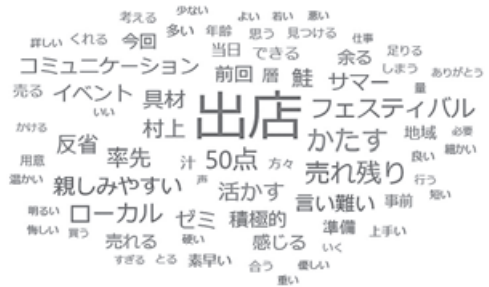


図4 ワードクラウド (村上)

まとめ

2年次前・後期の各演習で実施した性質の異なるサービスラーニングをとおして、学生は自分たちで決めたことをチームで協力してやり抜く達成感を体感し、同時に活動の反省を踏まえた改善策についても考えることができた。学生たちの活動の様子が分かる写真を資料として次頁に載せてあるので、併せてご覧いただきたい。3年次以降は学科の専門性を活かしたサービスラーニングに挑戦できるよう、着実に学びを積み重ねてもらいたい。

2019年以来、コロナ禍での中止を経て3年ぶりのサマーフェスティバルへの参加となったが、今回も長坂先生には変わらず誘っていただき大変感謝している。長坂ゼミの学生たちはイベント全体のリーダー役として準備期間から当日まで一生懸命頑張ってくれた。出店の手続きをしていただいたり、当日ブースに立ち寄って下さったりした方々を含め、お世話になった皆さんに心から感謝申し上げ、本報告を終えたい。

註

- 1) 2年次演習の科目名は「コミュニケーション演習1・2」で、受講者は前期10名、後期9名であった。「ゼミボランティア」は演習単位で自由に計画してよい奉仕活動で、活動への参加と報告書の提出が2年次後期の演習の単位取得要件になっている。
- 2) ユーザーローカルAIテキストマイニングを利用して分析を行った。図2のワードクラウドには、個人名や無意味語を削除するなど一部修正を加えてある。利用したオンラインツールのURLは次のとおりである。<https://textmining.userlocal.jp/>
- 3) この「まち協フリーマーケット」(主催:塩野町地域まちづくり協議会)は、2023年11月5日(日)(販売は10:30から13:30まで)に旧塩野町小学校で開催された行事である。

資料



写真1 話し合いの様子(サマフェス)



写真2 掲示物の作成(サマフェス)



写真3 サマーフェスティバル当日



写真4 村上市塩野町での出店